
彼女は濡れ女

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は濡れ女

【Zコード】

Z5020D

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

妖怪・濡れ女と主人公・輝の恋の行方とは?バトルあり笑いあり
多分感動あり!

今、俺は女の子を抱きしめている。

黒一色の長髪とつり目がとても似合つ少女だ。高木 麗華たかぎ れいかと言つ。彼女と出会つたのは、今から一時間程前の事。

土砂降りの中、傘を差して歩いていると、土手の上で傘を差さず

に俯いて佇んでいる全身黒服の少女を見付けた。

俺はその少女に歩み寄つて傘を差し出した。

「風邪引くぞ」

俺がそう言つと、少女は振り向いた。

「あんた、私が見えるの？」

いきなり意味不明な事を訊かれ、俺は頭に疑問符を浮かべた。

「見えなきゃ話しつけたりしないよ」

すると、少女の胸から一本の赤い紐が生えてきて、俺の胸の中に入り込んだ。

「何だよ、これ？」

「やつと見付けたわ。私が見える人」

「？？？」

意味が解らなかつた。

「私、濡れ女つて言う妖怪なの」

「妖怪が俺に何か用かい？」

「ブツ」

自称妖怪少女は吹きだした。

今の寒いギャグがそんなに面白かったのか。

「あ、ゴメン。質問に答えるわ。私ね、雨の日にあんたの様に見える人に取り憑いて呪い殺すのが目的なの」

「お前、アホな子だろ。そんな事、俺が信じる訳無え」

「そつ・・・じゃあ、呪い殺してあげるわ」

言って少女は念じる。死ね、と。

「あれ、可笑しいな」

「どうした、呪い殺すんじゃないのか？」

「先刻から念じてるんだけど・・・どうして？」

「俺に訊くな」

「こんな奴には関わりたくない。見捨てて帰ろ。」

そう思つた俺は、少女を置いて歩き出す。

「無駄よ」

真後ろから声。

振り向くと、先刻の少女はフワフワと浮かびながら付いていた。

不思議でも何でもない。何かトリックを使つてゐるんだ。この赤い紐もそだらう。

俺は赤い紐を両手で掴んで千切つた。が、手を離した瞬間にそれは元通りに繋がつてしまつた。

「何で？」

「それは靈糸れいじって言つてね、人間に取り憑くとその人間にくつつくのよ。これは一度くついたら外れる事は絶対に無い。例え千切ろうがハサミで切断しようが、何度も元に戻るのよ。ま、死んでくれば外れるんだけどね」

「あ、そ」

バカには付き合つてられつか。

妖怪が何だ。呪いが何だ。そんなもの、存在する訳が無い。こいつが見えない存在なら、それは恐らく、俺の脳が勝手に作り出した虚像に過ぎない。

「じゃあ触つてみれば？」

心を読まれていた。当たり前か。こいつは俺の脳が作り出し・・・つて、触る？

俺は恐る恐る、少女に手を伸ばした。

少女は、確かに、そこに存在していた。

これが幻覚なら、触れるのは可笑しい。

「どうお？信じる？」

「否、全然」

「しようがない。奥の手を使わさせて貰うわ」

「奥の手？」

少女はスースと通り抜ける様に俺の体の中に入ってきた。
途端、全身が麻痺して身動きが一切出来なくなつた。

金縛りか。これは骨格筋の弛緩が原因で起こる現象だ。

『どうお？これで信じる？』

突然、頭の中に声が響いた。少女の声だ。

どうやら脳が夢を見始めたらしい。つまり、幻聴だ。

「言つとくけど、幻聴なんかじゃないからね

俺は俺の考えを俺の口を通して否定した。

否、俺は喋つていない。そもそも喋ろうなんて意識していない。

「どうお？これで信じる？」

少女は俺の中から出て来るとそう訊ねた。

「ああ、お前は幽靈だ。幽靈は存在した。それを今、身を持つて証明した」

そう答えるしか選択肢は無かつた。だから俺はそう答えた。

「幽靈？あんな低級靈と一緒にしないで欲しいわね。私は妖怪よ

「同じもんだろ？」

「まあ、同じ靈子つて言つ物質で出来てはいるけど、靈力にはかなり差があるわね」

「あ、そ」

俺は振り返つて歩き出す。

「一寸、何処行くのよ？」

付いて來た。

「付いて来いなんて言つた覚え無いぞ」

「付いて行きたくなくても紐が繫がつてゐるから引っ張られるのよ」

厄介だ。

「今、厄介だと思つたわね？」

無視に徹底しよう。

「因みに無視しても無意味よ。あなたの心、読めるんだから」「無心にならう。

「無心になるの? 頑張つて」「ウザイ。

「あれ、無心になるんじゃなかつたの?」

「ウツセエんだよテメエ!」

俺は振り返り様に拳を突き出した。が、それはスッと透過してまう。

「あれ、先刻は触れたのに何故!?」「

「私、靈体だから、私が望まない時は触れないわよ」「もう一度殴つてみる。しかし、今度も通過してしまつ。

「ええいっ、一発殴らせらゴリラ!」

「そんなんに殴りたいの?」「

「ああ。殴らないと気が済まないね」「最低ね。まあ良いわ。代償は高く付くけど」「

「代償?」「

「あなたの体。私を殴る換わりに私があんたの体を貰う。死ぬまで使つてあげるわ」

「それだけはやめておこう。だから望め」「

「何を?」「

「触れられる事を」「

「それは別に構わないけど」「

俺は少女に触れた。感触がある。

「掛かつたな」「

「???」「

俺は北叟笑んで彼女を蹴り付けた。

「悪い、足が滑つた」

「やつたわね。約束通り代償は払つて貰うわよ」「

「おつと、俺はそんな約束はしてねえ。お前が俺に約束させたのは、

殴つたら体をやる、と言つものだ。蹴つたらやる、なんて約束はしていいない」

「じゃあ次からはそれも入れるわ」

「そうか。なら頭突きでどうだ！？」

俺は彼女の頭に自分の頭をぶつけた。

「痛！次やつたら乗つ取るからね！？」

「そうか。それじゃあまた変えなきゃな」

「・・・もう良いわ。私の負けよ。好きにして頂戴」

勝つたぜ、イエイ！って、バカバカしい。何の勝負をしていたんだ俺は。

「あ、そう言えば未だ名前言つてなかつたな。俺、日野神 輝ひのがみつて言つんだ。お前、名は？」

「高木 麗華」

「妖怪なのに名前があるのか」

「人間として生きてた時の名前よ！何か文句ある！？」

「生きてた？お前、人間だったの？」

「そうよ。あれは確か、1年前になるのかな。当時、私には好きな人が居たの。片思いだったわ」

「それで？」

「待ち合わせの日時を書いたラブレターを下駄箱に入れたわ。その日は今日と同じ土砂降りでね。待つてる時は晴れてたから傘を持つて無かつたのよ。で、待つてたら急に降り出して來た。それでも私は待ち続けたわ。彼が來るの。でも結局、彼は來なかつた」

「それで風邪を引いてその場で倒れて御陀仏か」

「御陀仏言うな！辛かつたのよ！？」

「すまん。で、相手の名前は？」

「それは・・・あんただよ日野神 輝！あんただが私を殺したのよ！」

「そうかそうか・・・って、あの名前の無いラブレターの差出人はお前か！あんなもん捨てちまつたよ！名前書いてなかつたから悪戯かと思つて！」

俺がそう言つと麗華はどーん！と効果音を出して地面に手を着いた。

「名前を書き忘れるなんてバカだわ。あんたの所為にして『ごめん』
『否、良いけどさ、別に。ま、そう落ち込むなつて

「これが落ち込まずに居られますか！」

「ああ、解つた解つた。解つたから元気だせ。そうだ、元気の出る
おまじない教えてやるよ」

「え？」

麗華は俺を見上げた。

「好きだ」

「え？」

「好きだつて言つたんだ。今のが手紙の返事だ。もひ言わねえから
な」

「何時から？」

「高校に入学した時からずっと」

「つて事は、私に声掛けた時から気付いてたの？私だつて
「気付いてた。すまなかつた。辛い思いさせて」

言つて俺は傘を手放して麗華を抱きしめた。

傘に遮られていた雨が、俺たちに降り掛かる。

「ん・・・」

何だ、この倦怠感は。

「どうしたの？」

「何か、気分が悪くなつてきた」

俺が言つと麗華は北叟笑んだ。

「漸く呪いが効いてきた様ね」

「え、どう言う事だよ？」

「言つたでしょ。私は濡れ女と言つ妖怪。濡れ女の役目は視える人
間に取り憑いて呪い殺す事」

「一寸待つてくれ。と言つ事は、俺はもつじき死ぬのか？」

「うん、この私の呪いでね」

「嫌だな。未だ死にたく無いよ」

「待ち合わせに来なかつたあんたが悪いのよ」

「そう・・・だな・・・」

その言葉を最後に、俺は意識を失つた。

「う・・・うん・・・」

眩しい太陽の日差しに俺は田を覚ました。
目の前には雲一つ無い空。

「此処は？」

「あんたが倒れた土手よ」

その声と共に、麗華が視界に入つてきた。
「それにしても、あんたシブトイわね」

「俺、生きてんの？」

「最悪な事にね」

「呪い殺すとか言つて結局出来なかつたな。お前、凄いヘタrena
俺は起き上がり様にそう言つた。

「う、五月蠅いわね！この次は絶対呪い殺してあげるから覚悟して
おくのね！」

「頑張つてくれ。つーか、どのくらい寝てた？」

俺の問いに麗華は指を二本立てた。

「三時間？」

首を横に振る。

「三日？」

頷いた。

「マジかよ。学校、一日も休んじまつたじゃねえか

「あんた、土日も学校行くの？」

麗華が可哀想なものを見る田で見つめた。

「え、今日、日曜？」

「そうよ。だから一杯遊べるわね。そうだ、私とテーートしない？」

「良いけど、一回帰るわ。無断外泊したこと……くしゅん…」

「あら、風邪？」

「誰の所為だコヤロー」

「あー、人の所為にする訳？」

「人じやないからな、お前」

「くつ・・・」

麗華は言葉に詰まつて反論出来なかつた。

「しつかし、デートつたつてお前、他の奴に姿視えねえだろ」

「それは誰かの体を借りれば良いわ」

「誰かつて誰の？」

「うーん、有紀檸？」

「有紀檸を借りんの？」

「だつて他に思い浮かぶ女居ないんだもん」

「嫌だね、俺は」

「何でよ？」

「だつて、あいつ、直ぐ暴力振るうじやん。大人しくしてれば可^愛いのに」

「まあ、確かにね。でも他に居ないし」

「そうだな」

言つて俺は立ち上がり、有紀檸の家に向かつ。
その途中、偶然にも有紀檸と出会つてしまつた。

「げつ、有紀檸！」

思わず叫ぶ俺。

「ああ？」

不良少年が着る様な服を着た長い金髪の美少女が睨み付ける。

「あ、い、良い天気だね？」

有紀檸は俺の問いを無視して間合いを詰めた。

「一寸の間ツラ貸せ」

言つて有紀檸は俺を路地裏へと連れ込む。

ガスン！　いきなり顔面にパンチを喰らつた。

「ど、どうしたの？今日はかなり機嫌悪そうだけど、嫌な事でもあつた？」

「彼氏に振られた」

「そりゃ振られるつて。有紀檸は直ぐ暴力振るうからな」

言つてから俺は気付いた。有紀檸の神経を逆撫でした事に。

「お前、オレに喧嘩売つてんのか？」

「否、売つてません。てか、オレって言つて直さねえか？お前も一応、女なんだし」

「それがどうした！？」

問い合わせながら拳を繰り出す。

俺は既の所で受け止めた。

「バーカ」

反対の拳が俺の腹に放たれた。

「がはっ！」

そのショックで俺は意識を失い掛けた。

「てめえ、今唾掛かつたぞ！…どうしてくれんだ！？」

「あ・・・あ・・・」

すいません、痛くて喋れません。

「あーあ、情けない。女にやられるなんてホントに情けないわね

五月蠅え、見てねえで何とかしろ！

「否、面白いから暫く見てるよ」

死んだらどうすんだよ！？

「元々呪い殺すのが役目だからね

呪いだ。俺は呪われてるんだ。麗華の呪いで有紀檸に殺されるんだ。

傍らでクスクスと笑う麗華が煩わしい。

「お前、近くで見ると案外格好良いじゃないか。お前、オレの彼氏にならないか？」

「地獄を見るより恐ろしい」

俺は思わず声を漏らした。

「何か言つたか？」

「い、いえ、何も！喜んでお付き合^{いっし}させて頂きます！」

あまりの恐ろしさに俺はそう言つてしまつた。

「人の彼氏取るなー！」

怒つた麗華が有紀檸の中に飛び込む。

「な、何だ？ 何か寒気がするぞ」

有紀檸が体を震わせた。

「ダメ、操れない！」

言つて麗華が有紀檸から出でてくる。

「何で操れないのよー!?」

俺が知るか！

「そんなんあ

「おい

有紀檸の視線が麗華に向く。

「お前だよお前」

有紀檸が麗華の髪の毛を掴んだ。

「痛いわね！ 放しなさいよー！」

「そいつが見えてんの？」

俺は訊いてみた。

「見えるてる。て言つたか何だ？ 妖怪の分際でオレを乗つ取ろうなんて
百万年早いんだよ！ つーかお前、ヘタレじゃねえか」

ヘタレ。有紀檸が麗華を呼ぶ時あだ名だ。

「え、有紀檸、見えてるの？」

「当然だ。言わなかつたか？ オレが靈媒師の娘だつて事^じ」

「そ、そ、う言えれば父が靈媒師だつたわね。確か、坂野^{さかの} 貞行さん。

一流の靈媒師だつたわね。てか髪抜けるから

安心しろ。お前の髪なんて有つても無くても変わんないから

「どう言つ意味よ？」

「一言で言えばブス」

「何言つてんだよ有紀檸。 麗華は可愛いぞ」

「お前、ヘタレの味方すんのか？」

「ああ、するね。お前より麗華のが何十倍も可愛いわ」「0・1秒以内にオレが可愛いと言い直せ」

「ゆきひ」

有紀檸の渾身の蹴りが俺の腹に決まった。

「言えるか！」

「今、挑戦してただろ。言えないなら挑戦する前に言え。て言つかも前、胸から出てるその紐は何だ？」

「ああ？ これか。俺、呪われてんだ。こいつ、濡れ女つて言つてな、俺に憑いたんだ」

「そうか。お前、土砂降りの中、そいつに傘を差し出したのか。良いだろ。オレが除霊してやる」

言つて有紀檸はお経を唱え始めた。

「嫌、やめて！」

効果は抜群だ。

「お前はこの世に居てはいけない。速やかに成仏しろ」

「嫌だ！ 私は輝を呪い殺すまで消えないわ！」

「往生際が悪いぞ。これでどうだ。觀自在菩薩行深般若波羅密多時」

「うわあああ！」

有紀檸のお経に悲鳴を上げる麗華。

「やめろ！」

麗華が可哀想に思えた俺は、有紀檸の顔面に拳をくれてやつた。

「輝・・・」

「麗華、大丈夫か？ 俺はお前の味方だからな。お前の事は俺が守つてやる」

「てめえ、よくもやりやがったな！」

キレた有紀檸が俺を打つ飛ばす。

俺は放物線を描いて地面に落下する。

「痛えじやねえか」

俺は立ち上がり、血痰を吐いて有紀檸に迫る。

「ふんっ」

有紀檸が右ストレート。俺はそれを擦り抜けて鳩尾に拳を埋めた。

「うつー！」

有紀檸が呻き声を上げて氣を失った。

「輝！」

麗華が嬉しそうな顔で俺に飛び付いてきた。

「有り難う、輝。私、あんたの事、前よりもっと好きになっちゃつた。これからずっと一緒に居ても良い？」

「俺を呪い殺す使命はどうすんだよ？」

「そんなのどうだつて良いじやん。て言つが、今の私には輝を殺せないよ」

「麗華」

俺は笑みを浮かべた。

「輝」

麗華は前に回り込み、接吻を求めた。

俺は唇を軽く尖らせ、麗華の唇に重ねた。

「ん・・・ふはっ」

唇を麗華から離した。

しかし、未だ足りないのか、麗華が唇を近付けてきた。このキス魔め。

俺は再び麗華と接吻をした。そして互いに舌を奥に差し入れる。ディープキスだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5020d/>

彼女は濡れ女

2010年10月8日16時00分発行